

死者生前の様子をうたう歌

—『萬葉集』における『生前叙述』の諸相と虫麻呂歌—

錦 織 浩 文

一 死者生前の様子をうたう歌

「高橋虫麻呂歌集」所出の、珠名娘子歌（9一七三八一九）、浦島子歌（9一七四〇一二）、真間娘子歌（9一八〇七七八）、菟原処女歌（9一八〇九一二）の四首は、一般に「伝説歌」と呼ばれている。これら四首は、〈古〉の人を取り上げ、その人にまつわる出来事の内容を歌の中で詳述しているところに特色があり、共通性がある¹。虫麻呂歌が取り上げる〈古〉の人は、絶世の美女であつたり、稀な体験をした特別な人であつたりするが、虫麻呂からすればそれは既に死した人である。その人にまつわる出来事を再現するということは、すなわち死者の生前の様子を叙述することにはかならない。

本稿は、虫麻呂の〈古〉の人をうたう歌が有する、死者生前の様子を叙述するという側面に光を当て、『萬葉集』全般における死者生前の样子の叙述のあり方を問題として扱い、それらと比較することを通して虫麻呂歌の特徴を捉えることを目的とする。こ

こでは、便宜上、死者生前の様子についての叙述を「生前叙述」として説明する。

虫麻呂の〈古〉の人をうたう歌四首は、『萬葉集』においては巻九雑歌と巻九挽歌に東国歌+畿内歌の組み合わせで二首ずつ収録されている。虫麻呂の歌作は藤原宇合の下で、東国歌（常陸国守時代）→畿内歌（知造難波富事時代）の順で形成されたと考えられ、「虫麻呂歌集」においてはこの四首はおよそ次の順に並んでいたものと推察される。今、その次第によって歌を掲げ、〈生前叙述〉の様相を示す（該当部分に傍線。以下同じ）。

A 詠勝鹿真間娘子歌一首¹

鵲が鳴く東の国に古にありけること今までに絶えず言ひける勝鹿の真間の手児名が麻衣に背袷着けひたさ麻を裳に織り着て髪だにも掻きは梳らず香をだに履かず行けども錦綾の中に包める斎ひ子も妹に及かめや望月の足れる面わに花のごと笑みて立てれば夏虫の火に入るがごとく港入りに舟漕ぐごとく行きかぐれ人の言ふ時いくばくも生けらしも

のを何すとか身をたな知りて波の音の騒く港の奥つ城に妹
が臥やせる遠き代にありけることを昨日しも見けむがごと
も思ほゆるかも（九一八〇七）

反歌

勝鹿の真間の井見れば立ち平し水汲ましけむ手見名し思は
ゆ（二八〇八）

B 詠上総周淮珠名娘子一首 并見歌

しなが島安房につぎたる梓弓周淮の珠名は胸わけの広き我
妹腰細のすがる娘子のそのなりのきらきらしきに花のごと
笑みて立てれば玉鐙の道行く人はおのが行く道は行かずて
呼ばなくに門に至りぬさし並ぶ隣の君はあらかじめおの妻
離れて乞はなくに鍵さへ奉る人皆のかく惑へればたちしな
ひ寄りてぞ妹はたはれてありける（九一七三八）

反歌

かな門にし人の来立てば夜中にも身はたな知らず出でてぞ
逢ひける（一七三九）

C 詠水江浦嶋子一首 并見歌

春の日のぬめる時に住吉の岸に出て居て釣り舟のとをらふ
見れば古のことと思ほゆる水江の浦島子が鯉釣り鯛釣りほ
こり七日まで家にも来ずて海境を過ぎて漕ぎ行くにわたつ
みの神の娘子にたまさかにい漕ぎ向かひ相とぶらひ言成り
しかばかき結び常世に至りわたつみの神の宮の内のへの妙

なる殿に携はりふたり入り居て老いもせず死にもせずして

長き代にありけるものを世間の愚か人の我妹子に告りて語
らくしましくは家に帰りて父母に事も語らひ明日のごと我
れは来なむと言ひければ妹が言へらく常世辺にまた帰り来
て今のごと逢はむとならばこの箱を開くぬゆめとそこら
に堅めし言を住吉に帰り来りて家見れど家も見かねて里見
れど里も見かねてあやしみとそこには思はく家ゆ出でて三年
の間に垣もなく家失せめやとこの箱を開きて見てばものと
ごと家はあらむと玉櫛筒少し聞くに白雲の箱より出でて常
世辺にたなびき行けば立ち走り叫び袖振り臥いまるび足す
りしつたちまちに心消失せぬ若くありし肌もぬれ黒く
ありし髪も白けぬゆなゆなは息さへ絶えてのちつひに命死
にける水江の浦島子が家とこる見ゆ（九一七四〇）

反歌

常世辺に住むべきものを剣太刀己が心からおそやこの君
（一七四一）

D 見菟原処女墓歌一首 并見歌

葦屋の菟原処女の八年子の片生ひの時ゆ小放りに髪たくま
でに並び居る家にも見えず虚木綿の隠りて居れば見てしか
といふせむ時の垣ほなす人の問ふ時茅葺壮士菟原壮士の伏
屋焚きすすし鏡ひ相よばひしける時は焼太刀の手かび押し
ねり白真弓綴取り負ひて水に入り火にも入らむと立ち向か

ひ競ひし時に我妹子が母に語らくしつたまさいやしき我が故ますらをの争ふ見れば生けりとも違ふべくあれやししくしろ黄泉に待たむと隠り沼の下はへ置きてうち嘆き妹が去ぬれば茅渚壮士その夜夢に見とり続き追ひ行ければ後れたる菟原壮士い天仰ぎ叫びおらび地を踏みきかみたげびところ男に負けてはあらじとかけはきの小大刀取りはきところづら尋め行きければ親族どちい行き集ひ長き代に標にせむと遠き代に語り継がむと処女墓中に造り置き壮士墓のものかもの造り置ける故縁聞きて知らねども新喪のこととも哭泣きつるかも(9一八〇九)

反歌

葦屋の菟原処女の奥つ城を行き来と見れば哭のみし泣かゆ(一一八一〇)

墓の上の木の枝靡けり聞きしごと茅渚壮士にし寄りにけらしも(一一八一二)

改めて傍線部を見ると、虫麻呂歌における《生前叙述》は、時間を追って丁寧になされているといえる。野家啓一「物語の哲学」³には「物語り行為」を「時間的に離れた複数の出来事を指示し、それらを(始め—中間—終わり)という時間的秩序に沿って筋立てる行為」と定義する。これによれば、虫麻呂歌における《生前叙述》は、総じて《物語り行為的》であるといえる(以下、虫麻呂歌四首の《生前叙述》のあり方をこの言い方で示す場合がある)。

一方、『萬葉集』全体で見れば、《生前叙述》を取り入れた歌は百首ほどあり、うち70%は挽歌、もしくは挽歌的な歌であり、多くはうたい手から見て身近な人の死をうたう歌である。虫麻呂歌のように、《古》の人を追慕する歌は数首に留まる。その他、雑歌は24%、相聞は6%であり、雑歌・相聞のいずれも《古》の人についての歌である。

結論を先にいえば、『萬葉集』中、虫麻呂歌のような《物語り行為的》な《生前叙述》は、雑歌・相聞・挽歌いずれにおいても、《古》の人の生前の様子をうたう歌の中には見出し難い。虫麻呂歌のような叙述は、むしろ、身近な人の死をうたう挽歌の中に認められる。以下、このことを具体的に確かめる。

二 《古》の人の生前の様子をうたう雑歌・相聞

はじめに《古》の人の生前の様子をうたう雑歌を見る。短歌の例は次のようである。

輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麻呂作歌(第三反歌)

日並皇子の命の馬並めてみ狩り立たしし時は来向ふ(一四九)

博通法師、往紀伊國、見三穗石室作歌三首

はだすき久米の若子がいましける(三三七)
見れど飽かぬかも(三三七)

山部宿祢赤人至伊予温泉

もしきの大宮人の熟田津に船乗りしけむ年の知らなく

(3333)

大宰帥大伴卿、讃酒歌十三首【第二首、第三首】

酒の名を聖と負せし古の大き聖の言の直しき(3339)

古の七の賢しき人たちも欲りせしものは酒にしあるらし

(三四〇)

仙柘枝歌三首

古に梁打つ人のなかりせばここにもあらまし柘の枝はも

(3387)

憶良誠惶頓首謹啓

松浦県佐用媛の子が領巾振りし山の名のみや聞きつつ居ら

む(5868)

足姫神の命の魚釣らすとみ立たしせりし石を誰れ見き

「鮎釣らす」(八六九)

大伴佐提比古郎子、ひとり朝命を被り、使を藩国に奉はる。鏡棹

してここに帰き、やくやくに若波に赴く。妾松浦^{佐用媛}、この別れ

の易きことを嘆き、その会ひの難きことを歎く。すなはち高き山

の嶺に登り、離り去く船を遙望し、悵然に肝を断ち、黯然魂を銷

つ。つひに領巾を脱きて燃る。傍の者、涕を流さずといふことな

し。よりてこの山を号けて、領巾燃の嶺といふ。すなはち歌を作

りて曰く、

遠つ人松浦佐用媛夫恋ひに領巾振りしより負へる山の名
(5871)

後人追和

山の名と言ひ継げとかも佐用媛がこの山の上に領巾を振り

けむ(5872)

最後人追和

万代に語り継げとしこの岳に領巾振りけらし松浦佐用媛

(5873)

卷七・勸旅作

古にありけむ人の求めつつ衣に摺りけむ真野の榛原(71)

一六六

大宝元年辛丑冬十月、太上天皇大行天皇幸紀伊國時歌十三首

【第十二首】

紀伊の国の菖弓雄の鳴り矢もち鹿取り靡べし坂の上にある

(91678)

麻呂歌一首

古の賢しき人の遊びけむ吉野の川原見れど飽かぬかも(9

1725)

右の歌々において取り上げられている(古)の人は「日並皇子」

「久米の若子」「古の大き聖」「古の七の賢き人たち」「松浦佐用媛」

「古の賢き人」といった格別な存在である。そしてその格別な人

の生前の一行為を切り取ってうたい、「時」「石室」「年」「言」「酒」

「柘の枝」「山」「石」「原」「坂」「川原」などの、事・物・時間・空間の価値を高めているという共通性がある。これらの歌においては、〈古〉の人の生前の様子をうたうことは、すなわち讃歌を形成する一手法としてあるといえる。このことは、長歌においても基本的に当てはまる。

過近江荒都時、柿本朝臣人麻呂作歌

玉たすき畝傍の山の榎原のひじりの御代ゆ生れましし神のことごと梅の木はいや継ぎ継ぎに天の下知らしめししをそらにみつ大和を置きてあをによし奈良山を越えいかさまに思はしめせか天離る鄙にはあれど石走る近江の国の楽浪の大津の宮に天の下知らしめしむ天皇の神の命の大宮はこと聞けども大殿はこと言へども春草の茂く生ひたる霞立ち春日の霧れるもしきの大宮とこ見れば悲しも
(一一九)

反歌

楽浪の志賀の唐崎幸くあれど大宮人の舟待ちかねつ(三〇)
楽浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも
(三二)

右の歌においては、「大和を置き」→「平城山を越え」→「大津の宮に天の下知らしめしける」というように遷都の道行きをうたう。内容としては遷都の一事であり、虫麻呂歌のような複雑さはない。が、〈古〉の人の行為をうたう歌の中にあつて比較的詳

しい叙述である。ここでは遷都の道行きの叙述によつて、近江遷都が実際に行われたこと、そして遷都された「大津の宮」がつて確かに存在したということが印象づけられているといえる。つまり、この歌において〈古〉の人の行為の叙述は、「大津の宮」の存在を印象づけるという効果的側面をもつと理解される。

橘歌一首 并見歌

かけまくもあやに畏し天皇の神の大御代に田道間守常世に渡り八杵持ち参る出来し時時じくのかくの葉を畏くも残したまへれ國も疾に生ひ立ち栄え春されば孫枝萌いつつほととぎす鳴く五月には初花を枝に手折りて娘子らにつとにも遣りみ白栲の袖にも扱入れぐはしみ置きて枯らしみあゆる実は玉に貫きつつ手に巻きて見れども飽かず秋づけばしぐれの雨降りあしひきの山の木末は紅ににほひ散れども橘のなれるその実はひた照りにいや見が欲しくみ雪降る冬に至れば霜置けどもその葉も枯れず常盤なすいやさかはえにしかれこそ神の御代よりよろしなへこの橘を時じくのかくの葉と名付けけらしも(18四一一)

反歌一首

橘は花にも実にも見つれどもいや時じくになほし見が欲し
(四一二)

閏五月二十三日、大伴宿祢家持作之。

右の歌においては、田道間守の「常世に渡り」→「参る出来し」

↓「残したまへれ」という「橘」持ち帰りに関する一連の行為をうたう。常世往還という一事に關する表現であり、虫麻呂歌のような複雑さはないが、一応逐次の叙述になつてゐる。こゝも「古」の人の行為の叙述は、「橘」を称える一手法としてあり、歴史的な由来を示して「橘」の価値を高めてゐると理解される。

こういう作もある。

筑前国怡土郡深江村子負原に、海に臨める丘の上に二つの石あり。……古老相伝へて曰く、「往者、息長足日女命、新羅の國を征討したまふ時に、この兩つの石をもちて、御袖の中に挿著みて鎮懷と爲したまふ。突には御裳の中なり。このゆゑに行人この石を敬拜す」といふ。すなはち歌を作りて曰く
かけまくはあやに畏し足日女神の命韓國を向け平らげて御心を鎮めたまふとい取らして蒔ひたまひしま玉なす
二つの石を世の人に示したまひて万代に言ひ継ぐがねと海の底沖つ深江の海上の子負の原に御手づから置かしたまひて神ながら神さびいます奇し御魂今のをつつに背きろかむ
(581-3)

反歌

天地のとも久しく言ひ継げとこの奇し御魂敷かしけらし
も(81-4)

右事伝言、那珂郡伊知郷菰嶋人、建部牛麻呂是也。

右は、過去の出来事の説明を、序文、つまり、歌の外側で行つ

ているところに特徴がある。過去の出来事は「古老相伝へて曰く……いふ」の形で示され、歌は「すなはち歌を作りて曰く」とこれを承けてなされる。序文はもとより、長歌においても出来事に關する叙述が詳しい。が、歌の多くは「足日女神の命」(神功皇后)の心内を察する部分に割かれており、結局、取り上げているのは「二つの石」を「置」いたという一行為に限られる。この歌では「二つの石」の存在こそが重要なのであつて、かくうたうことによつて、最終的にはこの石の現存する「子負原」を中心とする空間価値を高めることになる¹⁾と理解される。

かくして雑歌における《生前叙述》は、短歌・長歌とも、《古》の人の生前の一場面、一行為を切り取り、あるいは限定して、事物・時間・空間の価値を高めるようになされてゐる。ここには虫麻呂歌のような《物語り行為的》な叙述は認められない。そしてもう一点、虫麻呂歌と異なることがある。これら雑歌の例においては《古》の人の死を描くことではないということである。このことは注目してよいであらう。虫麻呂歌は基本的に、《古》の人の死を描いており、挽歌に属すA真間娘子歌、D菟原処女歌はむろん、雑歌に属すC浦島子歌においてさえ浦島子の死をうたつてゐるからである。

相間に目を移す。

柿本朝臣人麻呂歌四首

古にありけむ人も我がごとく妹に恋ひつつ寢寝かてずけむ

(4四九七)

今のみのわざにはあらず古の人ぞまさりて音にさへ泣きし

(四九八)

丹生女王贈大宰帥大伴卿歌二首

古人のたまへしめたる吉備の酒病まばすべなし貫簀賜らむ

(4五五四)

右の人麻呂歌は、我が思いを述べつつ〈古〉人の恋をうたい、恋の普遍性を表現していると見える。丹生女王歌は、〈古〉人の行為を述べて「吉備の酒」を称える。雑歌と同じく、これらは基本的に、事・物の価値を高めるうたい方といえる。ここでも虫麻呂歌のような〈物語り行為的〉な叙述は見られず、〈古〉人の死をうたうこともない。

一方、東歌の相聞には、やや変則的なうたい方が見られる。

葛師の真間の手児奈をまことかも我れに寄すとみ真間の手児奈を (14三三八四)

葛師の真間の手児奈がありしかば真間のおすひに波もとどろに (三三八五)

真間の手児名は、〈古〉の下総国にいたという美女。右二首のうち、第一首は手児奈と同じ時代の若者の立場による詠、第二首は手児奈を目的にした古老の立場による詠であるように見える。いずれも真間の手児奈の時代に近い者の立場による詠で、今の民謡にも見られるようなうたい方になっている。同じ娘子を

うたう、後掲の赤人歌、虫麻呂のA真間娘子歌は後代の第三者の立場による詠であり、従って、おのずと全体的にうたい方は異なったものになっている。ただし、虫麻呂のB珠名娘子歌は、東歌同様、当時の第三者の立場による詠と見られる面があり、注意を要する。

三 〈古〉の人の生前の様子をうたう挽歌

挽歌に移る。〈生前叙述〉を取り入れた挽歌には、大きく捉えて、〈古〉の人に関する歌と身近な人の死に関する歌とがある。今、二つに分けてそれぞれの状況を確かめる。まず、〈古〉の人の生前の様子をうたう短歌として次のような例がある。

長忌寸奥麻呂見結松哀咽歌二首

岩代の塵の松が枝結びけむ人は歸りてまた見けむかも (2一四三)

大宝元年辛丑幸于紀伊國時、見結松歌一首

日本朝臣人麻呂歌集申出

後見むと君が結べる岩代の小松が末をまたも見むかも (2一四六)

有間皇子の事件後、四十年ほどを経てうたわれたこれらの歌は、「岩代」の地に立つたうたい手が、有間皇子ゆかりの「松」を見たことを契機とし「松が枝」を結んだという皇子の行為を思い、皇子に心を寄せる歌である。実作としては、雑歌に認められた、

旅先の景物を見て〈古〉を偲んでうたう旅歌の内に入る歌と考えられるが、景物を称えるよりも〈古〉の人に対して心を寄せることに重心がかかっており、『萬葉集』収録時に挽歌としての扱いを受けたものと推察される。赤人の真間娘子歌、虫麻呂のA真間娘子歌・D菟原処女歌は、基本的に右の歌の系統に列なる歌と捉えてよいと考えられる。

一方、〈古〉の人をうたう長歌としては、まず、人麻呂の吉備津采女挽歌（2二七九）が挙げられる。しかしながら、この歌には事情説明がほとんどなく、采女の死がうたい手からして遠い過去のことなのか、近い過去のことなのか、明瞭ではない。近江朝の采女のことをうたうとするのが一般的な理解のようであるけれども、いずれにしても、「妹」に関する（生前叙述）は、「秋山のしたへる妹なよ竹のとをよる子らは」というように容姿を比喩的に表現するに留まる。〈古〉の人をうたう挽歌において（生前叙述）が詳しくなるのは、山部赤人の真間娘子歌あたりからである。

過勝鹿真間娘子墓時、山部宿祢赤人作歌一首 昔聞歌 東鑑題云「可立思」
昔勝鹿真間娘子

古にありけむ人の倭文機（フナト）の帯解き交へて伏屋立て妻問ひし
けむ勝鹿の真間の手児名が奥つ城をことは聞けど真木の
葉や茂りたるらむ松が根や遠く久しき言のみも名のみも我
れは忘らゆましじ（3四三二）

反歌

我れも見つ人にも告げむ勝鹿の真間の手児名が奥つ城とこ
ろ（四三三）

勝鹿の真間の入江にうち離く玉藻刈りけむ手児名し思ほゆ
（四三三）

長歌の傍線部では〈古〉の人の行為が、「帯解き交へて」↓「伏屋立て」↓「妻問ひしけむ」と順序立ててうたわれている。第二反歌「勝鹿の真間の入江にうち離く玉藻刈りけむ手児名し思ほゆ」は、先に見た有間皇子追慕歌と同系の歌であり、そして、この第二反歌の存在が、虫麻呂のA真間娘子歌の反歌「勝鹿の真間の井見れば立ち平し水汲ましけむ手児名し思ほゆ」を直接的に導いたものと理解される。傍線部があることによって、赤人歌は、単に「奥つ城」を見たことをうたうに留まらず娘の生命を引き立てる歌となった。その点、虫麻呂歌のうたい方に近づいているといえるが、しかし、赤人長歌の（生前叙述）は、周囲の男たちの行動であり、かつ娘子を修飾する句としてあるに過ぎず、虫麻呂歌のうたい方との違いはやはりある。

それにしても赤人歌は〈古〉の人の「奥つ城」をうたうという、新しい領域を拓いた画期的な歌であったといつてよい。赤人歌を承ける形で虫麻呂のA真間娘子歌、さらにD菟原処女歌が形成され、そして虫麻呂歌以後に次のような歌が現れることになるからである。ただ、虫麻呂歌以後の歌においても虫麻呂歌のようなう

たい方は見られない。

過羣屋処女墓時作歌一首 非親歌

古のますら壮士の相競ひ妻問ひしけむ葦屋の菟原処女の奥
つ城を我が立ち見れば長き代の語りにしつづつ後人の偲ひに
せむと玉鏢の道の辺近く岩櫓へ造れる塚を天雲のそくへの
極みこの道を行く人ごとに行き寄りてい立ち嘆かひある人
は哭にも泣きつつ語り継ぎ偲ひ継ぎくる娘子らが奥つ城と
ころ我れさへに見れば悲しも古思へば（9一八〇一）

反歌

古の信太壮士の妻問ひし菟原処女の奥つ城ぞこれ（一八〇

二）

語り継ぐからにもこゝだ恋しきを直目に見けむ古壮士（一

八〇三）

「田辺福麻呂歌集」所出の歌。長歌における《生前叙述》は六句、
「妻問ひ」という周辺の男たちの行動一つを表して処女を修飾す
るに留まる。その後には、「奥つ城」を見た後代の人たち（「道を行く人」「ある人」）のことをうたっており、虫麻呂歌とは異なる
うたい方になっている。

追同処女墓歌一首 非親歌

古にありけるわざのくすばしき事と言ひ継ぐ茅渚壮士菟原
壮士のうつせみの名を争ふとたまさはる命も捨てて争ひに
妻問ひしける娘子らが聞けば悲しき春花のにはえ榮えて秋

の葉のにはひに照れるあたらしき身の盛りすらますらをの
言いたはしみ父母に申し別れて家離り海辺に出で立ち朝夕
に満ち来る潮の八重波になびく玉鏢の節の間も惜しき命を
露霜の過ぎましにけれ奥つ城をこと定めて後の世の聞き
継ぐ人もいや遠に偲ひにせよと黄楊小櫓しか刺しけらし生
ひて靡けり（19四二二一）
娘子らが後のしるしと黄楊小櫓生ひ変はり生ひて靡きけらし
も（四二二二）

同じく菟原処女のことをうたう、大伴家持歌。傍線部が《生前
叙述》に相当し、虫麻呂歌と同様、《古》の出来事を時間に沿っ
てうたっていることが注目される。ただし、「春花のにはえ榮え
て秋の葉のにはひに照れる」というように、比喩によつて全体が
形成されており、虫麻呂歌に見られるような細部についての具
体的な説明はない。この歌で詳しいのは処女死後のことであり、墓
の上の木の枝、つまり、「後の世」の人が刺した「黄楊小櫓」の「生
ひ変はり」についてである。この歌の主題はむしろそこにあると
捉えられる。¹⁰

かくして《古》の人の生前の様子をうたう挽歌と虫麻呂歌にお
ける《生前叙述》を比べてみると、有間皇子追慕歌のうたい方、
赤人真間皇子歌における《古》の人の行為のうたい方、家持菟原
処女歌における時間に沿ったうたい方などに、虫麻呂歌に通じる
面が見られる。が、虫麻呂歌ほどの具体的な描写は認められず、

虫麻呂歌との差はなお大きいと捉えられる。

四 身近な人の死をうたう挽歌

最後に、身近な人の死をうたう挽歌を見る。まず、短歌の例。

み立たしの島を見る時にはたづみ流るる涙止めぞかねつる

(2178)

卷二挽歌「皇子尊宮舍人等勸傷作歌廿三首」の一首。「島」を見、生前、日並皇子がそこによくお立ちになっていたことを、舍人の立場で回想し、哀悼の意を表している。同様な例としては、夫の立場でうたう「逢ひし日」(2109)、「相見し妹」(2111)、「妹が見し棟の花」(5798)などがある。

こういう歌もある。

かくのみにありけるものを萩の花咲きてありやと問ひし君は
も (3455)

「天平三年辛未秋七月、大納言大伴卿薨之時歌六首」と題するうちの一首。臨終の場に居合わせた部下の立場により、主人の辞世の言葉「萩の花咲きてありや」を封じ込めた歌である。虫麻呂のC浦島子歌、D菟原処女歌にも直接話法が用いられており、通じるところがある。直接話法を取り入れることは、印象鮮明な(生前叙述)をつくる有効な方法といえる。が、いずれにせよ、短歌の場合は、生前の一場面、一行為を取り上げるのが限界であり、(物

語り行為的)な叙述とはなりえない。より詳しい叙述は、長歌において可能となる。

身近な人の死をうたう長歌において(生前叙述)を積極的に取り入れたのは、柿本人麻呂である。日並皇子挽歌(2167-9)

以降、人麻呂の身近な人の死をうたう長歌においては、(生前叙述)を取り入れることが必ず行われており、それが人麻呂長歌挽歌の特徴の一つといえる。その後、(生前の様子)死に至る過程(

死後の様子)へうたい手の感慨)をうたうことが様々に試みられ、最終的にこれら全てをバランスよくうたい込む、明日香皇女挽歌(2196-8)が現れるに至る。

そうした人麻呂挽歌の流れの中にあつて、(生前叙述)の占める割合が格段に高い歌が二つある。一つは、高市皇子挽歌である。

高市皇子尊城上殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首 并製歌

かけまくもゆゆしきかも言はまくもあやに畏き明日香の真神の原にひさかたの天つ御門を畏くも定めたまひて神さぶと磐隠りますやすみし我が大君のきこしめす背面の國の真木立つ不破山越えて高麗剣和射見が原の行宮に天降りいまして天の下治めたまひ食す國を定めたまふと鵲が鳴く東の國の御軍士を召したまひてちはやぶる人を和せと奉ろはぬ國を治めと皇子ながら任したまへば大御身に大刀取り佩かし大御手に弓取り持たし御軍士を率ひたまひ整ふる鼓の音は雷の声と聞くまで吹き鳴せる小角の音も敵見たる虎か

吼ゆると諸人のおびゆるまでにさざげたる旗の靡きは冬こもり春さり来れば野ごとにつけてある火の風の共靡くがごとく取り持てる弓弭の騒きみ雪降る冬の林につむじかもし巻き渡ると思ふまで聞きの畏く引き放つ矢の繁けく大雪の乱れて来れまづろはず立ち向かひしも露霜の消なば消ぬべく行く鳥の争ふはしに渡会の斎きの宮ゆ神風に吹き惑はし天雲を日の目も見せず常闇に覆ひたまひて定めてし瑞穂の国を神ながら太敷きましてやすみし我が大君の天の下奏したまへば万代にしかしもあらむと木綿花の栄ゆる時に我が大君皇子の御門を神宮に装ひまつりて：

生前の叙述（傍線部）が長歌一四九句中七六句あり、50%を占める。挽歌ではあるが、高市皇子の壬申の乱における実績を記録し称賛することに力が注がれている歌といえる。ただし、傍線部は、戦闘場面を多角的に捉え、それを比喩を用いて表現したものであり、複数の出来事を時間に沿って叙述しているというわけではない。

もう一つは、泣血哀慟歌である。

柿本朝臣人麻呂斐死之後、泣血哀慟作歌二首 非題歌

天飛ぶや輕の道は我妹子が里にしあればねもころに見まく欲しけどやまず行かは人目を多みまねく行かは人知りぬべみさねかつら後も途はむと大舟の思ひ頼みて玉かざる岩垣淵の隠りのみ恋ひつつあるに渡る日の暮れゆくがごとく照る

月の雲隠ること沖つ藻のなびきし妹は黄葉の過ぎてい行くと玉梓の使の言へば梓弓音に聞きて言はむすべせむすべ知らに音のみを聞きてありえねば我が恋ふる千重の一重も慰もる心もありやと我妹子がやまず出で見し輕の市に我が立ち聞けば玉たすき歎傍の山に鳴く鳥の声も聞こえず玉梓の道行き人も一人だに似てし行かねばすべをなみ妹が名呼びて袖ぞ振りつる（二二〇七）

短歌二首

八）秋山の黄葉を茂み惑ひぬる妹を求めむ山路知らずも（二二〇八）

黄葉の散りゆくなへに玉梓の使を見れば逢ひし日思ほゆ（二二〇九）

うつせみと思ひし時に取り持ちて我が二人見し走出の堤に立てる楓の木のかちごちの枝の春の葉の茂きがごとく思へりし妹にはあれど頼めりし児らにはあれど世間を背きしえねばかざるひの燃ゆる荒野に白たへの天領巾隠り鳥じもの朝立ちいまして入り日なす隠りにしかば我妹子が形見に置けるみどり子の乞ひ泣くごとに取り与ふる物しなければ男じもの脇ばさみ持ち我妹子と二人我が寝し枕ぐつて悲屋の内に昼はもうらさび暮らし夜はも息つき明かし喚けどもせむすべ知らに恋ふれども逢ふよしをなみ大鳥の羽易の山に我が恋ふる妹はいますと人の言へば岩根さくみてなづみ来し

よけくもぞなきうつせみと思ひし妹が玉かざるのかにだ
にも見えなく思へば(二一〇)

短歌二首

去年見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年離る

(二一一)

袈道を引手の山に妹を置きて山路を行けば生けりともなし

(二一二)

長歌には哀傷を表す直接的な表現はなく、叙事によつて悲しみを表現している。第一長歌、第二長歌ともに、妻とともにあつた《生前叙述》に多くを割き、夫と妻との仲睦まじい様子を表現している。ただ、この歌においてもなお、複数の出来事を時間に沿つて叙述するという印象は薄い。この歌でむしろそのようにして具体的に叙述されているのは、波線部の妻亡き後の夫の様子である。第一長歌、第二長歌ともに、妻亡き後の夫の様子が長歌の約半分を費やしてうたわれている。このことは記憶しておいてよい。というのは、虫麻呂のD菟原処女歌にはこれと似たうたい方が見られるからである。D歌は、菟原処女亡き後、茅渚壮士・菟原壮士のことをうたい、さらに親族がとつた行動をうたつており、残された者の様子を叙述しているところに特徴がある。人麻呂の泣血哀慟歌はD浦島子歌との関係性も看取され、虫麻呂の畿内歌C Dに影響を与えている可能性が窺える¹⁰。

さらに時代が下ると、《生前叙述》の一段と詳しい歌が現れる。

恋男子名古日歌三首

其二 短歌

世の人の貴び願ふ七種の宝も我れは何せむ我が中の生まれ
出でたる白玉の我が子古日は明星の明るる朝は数袴の床の
辺去らず立てれども居れどもともに戯れ夕星の夕になれば
いざ寝よと手をたづさばり父母ももうへはなさかりさくさ
の中に寝むとうつくしくしが語らへばいつしか人も成
り出でて悲しけくも良けくも見むと大船の思ひ頼むに思は
ぬに横しま風のにふふかに覆ひ来ればせむすべのたどきを
知らに白袴のたすきを懸けまそ鏡手に取り持ちて天つ神仰
ぎ祈ひ禱み国つ神伏して額つきかからずもかかきも神のま
にまにと立ちあがり我れ祈ひ禱めどしましくも良けくはな
しにやくやくにかたちくつほり朝な朝な言ふことやみたま
きはる命絶えぬれ立ちをとり足すり叫び伏し仰ぎ胸打ち嘆
き手に持てる我が子飛ばしつ世間の道(五九〇四)

反歌

若ければ道行き知らじ賄はせむしたへの使負ひて通らせ

(九〇五)

布施置きて我れは祈ひ禱むあざむかず直に率行きて天道知
らしめ(九〇六)

右一首、作者未詳。但、以裁歌之体似於山上之操、載此次
焉。

右の歌では、古日の生前の様子が生き生きとうたわれる。「父

母もうへはなさきくさの中にを寝む」という言葉の引用が、古日の存在感を一気に高める。死に至る過程の叙述も詳細である。古日の状態の悪化、親のうろたえ、古日の衰弱と死。そして、死後の様子として親の嘆きも丁寧にうたわれている。こうした叙述の詳しさは、虫麻呂のとくに饒内歌CDに重なる。C浦島子歌における老死の描写、D菟原処女歌における親族の嘆き、そして二首に見られる直接話法など、CD二首と古日歌との類似点をいくつか指摘することができる。

かくして、身近な人の死をうたう長歌においては、泣血哀慟歌、古日歌など〈生前叙述〉に当てる割合の比較的大きい歌が見られ、虫麻呂歌（とくに饒内歌CD）における〈生前叙述〉のあり方に重なるところがあると捉えられる。

五 虫麻呂歌における〈生前叙述〉の位置と性格

虫麻呂の〈伝説歌〉における〈生前叙述〉という側面に注目し、『萬葉集』における〈生前叙述〉の諸相と虫麻呂歌における叙述の仕方について考察してきた。はじめに述べたように、虫麻呂の伝説歌における〈生前叙述〉は、〈古〉の人の複数の行為をつなぎ合わせて筋立てる〈物語り行為的〉な性格を有している。これに対して、『萬葉集』の〈古〉の人をうたう雑歌においては、事・物・時間・空間の価値を高めるべく、格別なる〈古〉の人の生前

の特定の行為を取り上げてうたい、〈古〉の人の生前のことをうたう相聞においては、当時の若者、古老の立場により過去の出来事をうたっており、いずれにおいても、虫麻呂歌の〈生前叙述〉のような〈物語り行為的〉な性格は認められない。

『萬葉集』の〈古〉の人の死をうたう挽歌においては、有間皇子追慕歌の発想のありよう、赤人真間娘子歌における〈古〉の人のうたい方、家持菟原処女歌における時間に沿ったうたい方などに、虫麻呂歌に通じる面が見られる。が、それらは、生前の一行を切り取るうたい方、周囲の人の行為のみの叙述、あるいは比喩的表現であるなどして、虫麻呂歌における〈生前叙述〉のあり方との差はなお大きいといえる。結局、虫麻呂歌の〈生前叙述〉のあり方に近いのは、身近な人の死をうたう挽歌の長歌のうち、泣血哀慟歌、古日歌など〈生前叙述〉に当てる割合が多い歌である。

言えば、後代の第三者の立場でうたう場合、〈古〉の人の生前の様子は、伝聞に基づいて追想するほかはなく、うたい手は想像を加える形で生前の様子を思い描くことになる。『萬葉集』中の〈古〉の人のことをうたう歌における生前の叙述が、総じて控えめになされているのは自然なことといえよう。一方、身近な人の死については、うたい手自身がかつて同じ時空に身を置いたことが手伝って、体験を回想する形で比較的詳細に生前の様子を再現することができるといえる。身近な人の死をうたう挽歌における生前の叙

述が詳細になされることがあることもまた、自然なことといえるであろう。

虫麻呂歌における《生前叙述》のあり方は、《古》の人をうたう雑歌・相聞・挽歌のそれではなく、身近な人の死をうたう挽歌のそれに近い。改めていえば、虫麻呂歌における《生前叙述》のあり方は、《古》の人をうたう歌として普通でないということである。A 真間娘子歌には「遠き代にありけることを昨日しも見けむがごとく思はゆるかも」とあり、D 菟原延女歌には「故縁聞きて知らねども新喪のごとも哭泣きつるかも」とある。わざわざこのように断っているのは、《古》の出来事であるにもかかわらず身近な人の死に接した者のように生前の様子をうたう異常性を先取りし、聞き手（読者）の抱く違和感を緩和するために用意されたものと捉えることができるであろう。A 真間娘子歌、D 菟原延女歌は、赤人真間娘子歌によって拓かれた、《古》の人の「奥つ城」をうたう歌の流れを汲むが、《古》の人の生前の様子を身近にいた人の死に接した者のようにうたうという独自なうたい方を示しているといえる。

他方、雑歌の二首BCはどうかといえば、B 珠名娘子歌は、娘子和同時代に存した第三者が見てきたように《古》の出来事をうたう、死をうたわないという、東歌の相聞に似たうたい方となっている。また、C 浦島子歌は、身近にいた人の死をうたう挽歌に見られる叙述の仕方を行いながら、挽歌の枠を超えた歌として新

しよを見せる。二首におけるこうしたうたい方は、《古》の出来事、《古》の人をうたう歌をなすにあたり、《物語り行為的》な《生前叙述》を多角的な方法で試みた結果として導かれたものと捉えられるのではないかと考えられる¹⁹。

以上をもつて本稿の結論とする。最後に述べたように、虫麻呂歌における《生前叙述》のありようは身近な人の死をうたう挽歌のそれに近い。人麻呂泣血哀慟歌、古日歌との類似性は中でもとくに注目される。この点を掘り下げて考察することを次の課題としたい。

(二〇一七・八・二三)

注

(1) 虫麻呂の伝説歌の特色と共通性については、拙稿「虫麻呂伝説歌の特性」(岡大國文論稿第四十四号・二〇一六年) 参照。

(2) 「虫麻呂歌集」の原型推定については、拙著「高橋虫麻呂研究」(おうふう・二〇一一年) において述べた。

(3) 野家啓二「物語の哲学」(岩波現代文庫・二〇〇五年・三二六頁)

(4) 鎮懐石歌の主題が「子負原」を中心とする空間価値を高めることであつたと見られること、村田右富英「万葉集」巻五の前半部の性質について(『萬葉集研究第三十四集』塙書房・二〇一三年) に考察がある。

(5) 14三三八四の歌について、「注釈」、「私注」、佐々木「評釈」、「全註釈」、窪田「評釈」、「新編全集」等に民謡とし、「古典全集」等に民謡的であるとす。三三八四の歌を「若者の立場」、三

三八五の歌を「古老の立場」とする見解は、『釈注』に見られる。

- (6) 下総国の相間と同様なうたい方は、同じく東歌の信濃国相間にも見られる(14三三九八)。

- (7) 有間皇子追慕歌、および赤人真間娘子歌と虫麻呂真間娘子歌との関係性についての私見は、別稿にて述べる予定である。

- (8) 澤瀉久孝『注釈』には、嘆きの大ききから現役の采女の死のこととし、「志賀津」「大津」とあることから近江朝のこととして、持統朝の人麻呂が「その時の人に身をなしての」「創作」がこの歌であると説く。伊藤博「人麻呂における幻視」(『萬葉集の表現と方法下』) 塙書房・一九七六年、初出一九七六年)には、持統朝の現在に起きた采女の悲劇を近江朝の采女の悲劇に重ね合わせたと説く。神野志隆光「吉備津采女挽歌をめぐる」(『柿本人麻呂研究』) 塙書房・一九九二年、初出一九八七年)には、長歌に描かれるのは近江朝のものであり、「志賀津」「大津」が示すのは持統朝の意識であるとする。以上、菊川恵三「吉備津采女挽歌」(『セミナー』万葉の歌人と作品第三卷) 和泉書院・一九九九年) 参照。

- (9) 赤人真間娘子歌と虫麻呂真間娘子歌との関係については、岡部政裕「高橋虫麻呂と田辺福麻呂」(『萬葉集大成10』) 平凡社・一九五四年)、清水克彦「赤人における叙景形式の変遷」(『原赤人集』の構造から) (『萬葉論集第二』) 桜楓社・一九八〇年、初出一九七七年)、坂本信幸「伝説歌の女性」(『女人の万葉集』) 高岡市万葉歴史館論集10』笠間書院、二〇〇七年) など参照。家持歌においてうたわれる「櫛」の「生ひ変はり」については、虫麻呂歌にも福麻呂歌にも見られず、家持歌において新たに付

加された要素といえる。

- (11) 日並皇子挽歌の(生前叙述)が皇子に対する周囲の期待を表すのに対して、明日香皇女挽歌の(生前叙述)は、「春へは花折りがざし…思ほしし君と時時出でまして遊びたまひし」というように、皇女本人の行爲を写し取っている。皇女本人の生前の様子をうたうことによって、皇女の生命が歌の中に封じ込められ伝えられる。その点、虫麻呂伝説歌のありように近い。ただ、この歌においては(生前の様子)→(死に至る過程)→(死後の様子)→(うたい手の感慨)がバランスよく配置されており、(生前叙述)が占める割合はおのずと低い。
- (12) 人麻呂泣血哀協歌と虫麻呂浦島子歌との関係性については、拙稿「高橋虫麻呂浦島伝説歌に関する一考察」(世間の愚か人の)を中心として」(『美夫君志第八十三号・二〇一二年)において言及した。

- (13) 古日歌は、古日生前の様子と死に至る様子を記録するような性格が強く、「他ひ」を旨とする従来の挽歌のあり方から離れるところがある。中西進「古日の歌」(『山上憶良』) 河出書房新社・一九七三年)には、「こうした体質において、はじめて非伝統的な挽歌(いやむしろ挽歌ですらないのだろうか)が可能となった。それほどに、この作からは鎮魂性が剥離しているのであって、太々と前面に押し出されているのは、子を失おうとしている人間の悲しみ、そしてそれを現実として甘受せねばならぬ人間の歎きであった。死者への奉仕から慟哭する人間そのものへと、主体を転倒せしめたところに、この作の特質がある」(四九六頁)とする。

(14) 浦島子歌においてそうしたい方が可能であるのは、うたい手の設定方法と関係していると考えられる。このうたい手の設定については、拙論「浦島伝説歌におけるうたい手の設定」(『萬葉語文研究 第9集』和泉書院・二〇一三年)において考察した。珠名娘子歌におけるうたい手の設定についても今後考察する予定である。

(にしこおり ひろふみ 阿南工業高等専門学校教授)

研究室受贈図書雑誌目録Ⅰ (平成二十九年一月—十二月)

《単行本》

帝塚山派文学学会 紀要 創刊号(帝塚山派文学学会 運営委員会 二〇一七年三月)

二松學舎創立百四十周年記念論文集(二松學舎 二〇一七年十月)

《雑誌》

愛知教育大学大学院 国語研究(愛知教育大学大学院国語教育専攻) 二五

愛知県立大学 説林(愛知県立大学国文学会) 六五

愛知淑徳大学国語国文(愛知淑徳大学国文学会) 四〇

愛知大学 國文學(愛知大學國文學會) 五六

愛文(愛媛大学法文学部国語国文学会) 五一・五二

青山語文(青山学院大学日本文学会) 四七

湖の本(秦 恒平) 一三三、一三四、一三五、一三六、一三七

愛媛国文と教育(愛媛大学教育学部国語国文学会) 四九

大阪大谷国文(大阪大谷大学日本語日本文学会) 四五、四六

大阪国際児童文学振興財団 研究紀要(大阪国際児童文学振興財団) 三〇

大妻女子大学紀要——文系——(大妻女子大学) 四九

大妻国文(大妻女子大学国文学会) 四八

香川大学国文研究(香川大学国文学会) 四一

学芸 国語国文学(東京学芸大学国語国文学会) 四九

學習院大學國語國文學會誌(學習院大學國語國文學會) 六〇

學術研究——人物科学・社会科学編——(早稲田大学 教育・総合科学学術院) 六五

学大国文(大阪教育大学 語教育講座・日本・アジア言語文化コース) 五九

活水論文集 文学部編(活水女子大学) 六〇

金沢大学 国語国文(金沢大学国語国文学会) 四二

上方文化研究センター 研究年報(大阪府立大学上方文化研究センター) 一七

北九州市立大学 文学部紀要(北九州市立大学文学部 比較文化学) 八六、八七